郷土の一戸直蔵から学ぶ

一科学者に光を当て、その時代（時流・時代的性格）と人物像を考える

福士光俊（青森県）

Ⅰ、一戸直蔵（1878 年~1920 年）天文学界先駆者の一人

略歴　現青森県つがる市に出生、東奥（とうおう）義塾（弘前市・以下東義）、東京帝国大学（写真入学時、以下東京帝大）、同大学院を経て、シカゴ大学附属ヤーキス天文台へ留学。変光星の観測に本格的に取り組み、英文で西欧の多く雑誌に発表する。帰国後、東京帝大講師、東京天文台観測主任に就く。日本天文学会創設、機関誌「天文月報」発刊、理学博士。台湾の新高山への天文台調査に

２回探検。麻布からの新天文台移設場所選定で、台長と意見対立し依願退職する。その後、科学ジャーナリストになり、総合科学雑誌『現代之科学』を発刊。天文学や数学の著書や、翻訳書多数。臨終直前の口述自伝『過去を追想して将来に及ぶ』が名書とされている。

「50 年早く生まれた人」といわれている。

Ⅱ、一戸の郷土（津軽）の一般的な傾向として、

自然条件　辺境、本州北端、詩情豊か、未開発、貧困、夏季は冷涼、冬季は厳寒である。

気　質　　一途、真っ正直（世渡りの拙さ）、非協調性、強情（情っぱり）、反骨、固い信念、芯の強さ、忍耐強い、逆境克服力、孤高、秘める志と闘志、寡黙と爆発（血が騒ぐ）、

人　物　　特色のある人物を輩出し、死没後の評価が高い。

淡谷のり子、棟方志功、太宰治、寺山修司、唐牛宏、川口淳一郎、三浦雄一郎

等が挙げられる。一戸もこの風土で幼少時から青年期を過ごし、気質を培ったと想像される。

Ⅲ、一戸の背景、人間関係、天文界以外の交友・関連人物

１、出身学校

一戸が地元の簡易小学校を卒業後、進学を希望したが、父は家業の農業を覚えることを強要した。農業に我慢できなかった一戸は、とうとう４年後家出して青森の私塾に入るが、弘前の東義に転学する。現青山学院や錦城中学校、仙台の二高に進学する。しかし、家族からの学資が途絶えたために、退学し、一時郷里の教員をする。半年後に二高に復学し、東京帝大、のちシカゴ大学天文台に私費留学する。紆余曲折の学校生活を送った一人である。

このように一戸が学んだ多くの学校で、学資の心配をしながら、苦学生活を強いられた。これらの出身学校から東義と東京帝大の二校に限定し、その校風や人間関係を取り挙げる。

① **東奥義塾**（ミッションスクール・弘前藩校 1796 年が前身）の存在が大きい。

東北初の外国人教師招聘や学生の交換留学を行う。校風は、洋学受容や自由、演説、自己表現を重視し、東北では先進的な教育を導入した。創設者、生徒、留学者等の著名人や関係者は、

兼松成言　1810 生　昌平坂学問所で儒学・漢学、洋学（蘭学）を学ぶ。東義結社人筆頭。

菊池九郎　慶應義塾（1858 年蘭学塾創設）出身、福澤諭吉や西郷隆盛と面識、東奥の西郷隆盛といわれる。東義創設（1873 年、理事者、教員交流、慶應義塾から 3 人招き慶應弘前校的存在）東奥日報（自由民権派、青森県の地方紙創刊）、国会開設運動、衆議院議員 9 期、弘前初代市長、山形県知事、農商務省農政局長、九代弘前市長。

菊池幾久　(九郎の妻)女子部教師。

菊池群之助（九郎弟）インデイアナ・アズベリー（現デポー）大学留学

珍田捨己　東義 1 期生として 1876 年の天覧授業（青森 10 名出席）で英文演説（日本初？）アズベリー大学留学、駐米大使、侍従長、伯爵。

佐藤愛麿　珍田と東義同期、天覧授業で英文演説
アズベリー大学留学、在米特命全権大使、宮中顧問官。

伊東　重　家業医師、珍田らと東義同期、天覧授業　英文演説、イング先生と毎日 2 時間の会話の勉強、東京大学医学部入学、北里柴三郎と親交、帝国大学医科大学卒、帰郷、青森市立病院長、県医師会長、儒教的教えと医学＝養生哲学、衆議院議員 1 期、パリの病院で客

陸　羯南　本名中田実、菊池の実家の前の家、伊東と東義で机を並べる、新聞界で論陣、西洋一辺倒の政府批判、三宅雪嶺、国民主義、雑誌『日本人』、独立新聞『日本』社長、正岡子規入社、子規臨終に河東碧梧桐と立会、柴四郎と交流。

岩川友太郎　珍田らと東義同期、東義英語教師、東京大学理学部生物学科 1 回卒業生、大森貝塚発見者のモースの愛弟子、東京高等師範・東京女子師範学校教授、貝分類研究の嚆矢。

本多庸一　横浜でキリスト教の洗礼、東義塾長・青山学院長兼務、一戸転学の契機、自由民権運動。

大澤正毅　東義、青森師範、一戸の小学校時の恩師、進学を督励、のち校長、石碑発起人。

山田良政・純三郎・四郎の兄弟と縁戚（後出）

一戸兵衛　東義、西南・日清・日露戦争で乃木希典（陸軍大将）から高評。第 17・第 4・第 1 師団長、陸軍大将、教育総監・官立学習院院長、明治神宮宮司、帝国在郷軍人会長、書家。

柴 四郎　東義、筆名東海散士『佳人之奇遇』、会津藩士、一時下北移住、ペンシルバニア大卒、福島県選出衆議院議員 10 期，隈板内閣農商務次官、外務参政官、陸軍大将柴五郎(北京籠城で国際的名声)の兄である。

畑井新喜司　東義、一高、シカゴ大学院、ペンシルベニア大学教授（野口英世在籍時）、東北大学生物学教室開設・教授、海洋生物学、帝国学士院賞受賞。

等が挙げられる。

このように、本州北端の東奥義塾は、明治初期に国内的に各界で活躍した人材を数多く輩出していることは驚異に値するのではないだろうか。自由で個性を尊重した教育方針は、福澤諭吉の慶應義塾の学風、精神を引き継いでいるからと考える。

② 東京帝大と東京天文台の階級・格差社会時代

一戸が東京帝大理科大学（1900 年~1903 年）同大学院（1903 年~1905 年）に在学し、シカゴ大学ヤーキス天文台（1905 年~1907 年）に留学研究後、東京帝大の講師と、東京天文台の観測主任（1907 年~1911 年）に就いたことは、既述したことである。天文台移転場所をめぐって、寺尾寿初代台長（在任期間 1888 年~1919 年）の三鷹派と高地高山説の一戸派が激しく対立した。結果的には、一戸の依願退職の形で落着したが、東京大学から転勤や降格でなく、実質的には追放された。上司の高圧的な上下関係の表れではないだろうか。これは、東京大学の歴史にも起因すると思われる。

東京大学の沿革は、1877 年に法・理・文・医学部で創設され、1886 年に帝国大学となる。1897 年京都帝国大学の創設に伴い、帝国大学を東京帝国大学と改称。東北大学や北海道大学等の 7 大学が〇〇帝国大学と改称された。この名称がアジア太平洋戦争後まで続いた。その後、東京帝大の名称が 1947 年に東京大学と改称（東京大学ホームページ）。

東京大学から帝国大学へと校名変更は、帝国大学令の公布によるが、帝国大学になったこことにより、大日本帝国や天皇への忠誠・貢献・奉仕する官僚の養成大学としての特色を濃くした。この期の高官（高等官・高級官僚）は、勅任（勅令、天皇から辞令）官や奏任官があり、極めて高い地位の官僚で、特別の待遇を受けていた。社会秩序を維持するために、上司の権限は絶対であった。

また、教育勅語（1890 年）は、儒教思想の浸透をはかるために発布され、忍従、献身、上意下達の精神を植え付けるための効果をもたらした。

一戸が帰国後の講師や観測主任した時代は、天文台長の官位は教授で、高官待遇であった。天文台移転時の意見対立は、圧倒的に台長に優位であった。寺尾台長が、**「これは相談でない。会議でもない。天文台の移転は三鷹村へ決まった。」**と発した言葉が、厳然とした上下関係を表している。この一言で移転論争が決着した。降職となった一戸は、野に下り、科学ジャーナリストとして再出発した。

因みに、現国立天文台の構内に 1915 年に高等官官舎が 2 世帯新築された。その後改修され、現在は三鷹市登録有形文化財登録となり、「星と森と絵本の家」として一般に活用されている。この立派な旧官舎は、高等官が厚遇されていたことを物語っている。

このような事象は、階級・格差社会の典型であり、当時の国家体制の秩序を維持するために、必要であったのであろう。

2、 思想家・知識人・論客

一戸との交友のある一流の知識人や文学者、政治家、軍人として

吉野作造　民本主義者、二高時代に「文科の吉野・理科の一戸」の秀才といわれた。東京帝大同期、同教授。

長谷川如是閑　大阪朝日新聞論説委員長、一戸と河東とのアルプス登山を企画、陸羯南の新聞『日本』記者。名言「仕事に奴隷的の感じの伴わない世界」、一戸へ追悼文「天幕旅行は偉観でした」、文化勲章受章。

河東碧梧桐　俳諧の大家、正岡子規没後の『日本俳句』選者、アルプス登山に同行、陸羯

南と親交。

三宅雪嶺　哲学者、日本の伝統を重視、陸羯南『日本人』、一戸への追悼文、文化勲章受章。

江渡狄嶺（えとてきれい）　思想家。青森県五戸町出身、一戸と二高・東京帝大同期、内村鑑三と知友、三宅雪嶺より嶺を頂く、陸羯南と親交。

３、文学者

田山花袋　自然主義の文豪、一戸の『暦の話』をヒントに『トコヨゴヨミ』に鳴海と一戸を登場させる。

鳴海要吉　青森県黒石市出身、花袋に傾倒、ローマ字、エスペラント語の普及運動。

若山牧水　浪漫的作風の歌人。

和田山蘭（さんらん）　青森県五所川原市出身、牧水の「創作」入会、牧水と兄弟以上の付き合い,『ローマ字』（現代之科学）発行に参画。

４、政治家

後藤新平　岩手県出身、満州総督府民政局長、台湾天文台調査に協力、満鉄総裁、内相、外相、東京市長、伯爵。

菊池九郎（衆議院議員９期、知事）と菊池良正（衆議院議員６期）父子。

一戸が九郎の長女イ子（ネ）と結婚。

５、軍人・革命運動家　一戸の妻の甥が山田良政・純三郎兄弟

山田良政　中国の辛亥革命 1911 年を指導した孫文の通訳。孫文は山田兄弟を「最も信頼のおける兄弟」という。海軍、中国民に同情。清朝内乱で虐殺される。

山田純三郎　兄良政の遺志を受け継ぎ、革命に奔走。山田兄弟は梅谷庄吉、宮崎滔天（とうてん）と共に親交。

一戸兵衛（再）一戸の碑文の篆刻者

等の各界の著名人を列挙した。各界の著名人と濃淡はあるが、その範囲は驚くほど広い。

Ⅳ、親族の系譜　一戸家・菊池家・山田家

〇士族の山田家と菊池家、山田三兄弟について

山田良政　　菊池九郎の妻の甥。海洋大学卒、函館、昆布会社上海支店勤務、孫文と親友、33 歳で清朝に虐殺。孫文の追悼文の石碑弘前市に建立。孫文は、山田先生と呼ぶ。弘前へ扁額「吾が父の如し」、同孫文の直筆の慰霊碑建立。1927 年中華民国が孫文の陵墓の隣に良政の碑を建立。中国深圳の公園に乗馬姿の銅像あり。

山田純三郎　日露戦争通訳、満鉄、兄の遺志を継ぐ。遺骨を探す孫文、孫文秘書、袁世凱政治の対応を相談・日中盟約（革命政権を支える）、1925 年の孫文の臨終に日本人唯一立合う。孫文の辞世の言「革命未だ成らず。同志なおすべからく努力すべし。」を聞く。

山田四郎　　一戸と東奥同級生、米国に永住する。

〇一戸家は農民

一戸家は、田舎では豪農に入るが、菊池家と比較して、家柄には格段の差があった。

しかし、東京帝大大学院出身の一戸と菊池九郎が衆議院議員時に、長女のイ子（ネ）と結婚する。以来、著名人との交流範囲がより広汎な人物交流となり、より深くなっていった。

Ⅴ、一戸直蔵から学ぶ

１、旺盛で不屈な研究心と先見性を学ぶ。

渾身の勉学と研究、科学全体の発展に命を掲げた一人である。留学時は、アメリカの自由な研究体制や、最先端の学術に触れる。一戸が先見性をもって提案した観測所設置の条件の、郊外の高地高山説が、のちに野辺山、岡山、チリ、ハワイ島等に各専門の観測所が次々と設置され、現在まで重要な研究機関となっているのではないだろうか。

また、下野後は大学講師を務め、膨大な書籍の著作に取り組み、機関誌『現代之科学』を発行する。その最終巻に『主張』を掲載した。その著の回想や提言は名言といわれている。このような一戸の生涯には、家業の農業従事、家出、進学、転学、復学、自費留学、日本天文学会創設、機関誌『天文月報』、東京帝大追放、総合科学雑誌の創刊・廃刊、膨大な論文、著書、翻訳の発刊等々を経た一戸には、多くの紆余曲折があったが、苦難に耐えた、正しく超人的な功績があったと思う。

２、理念を学ぶ。

・一般的に言われる「専門家ほど視野（了見）が狭い」には、一戸は、当らないと思う。

江渡狄嶺「**他の世界の理解がなく、自分の世界しか持たない　人がある。**
他の世界だらけで、自分の世界は　チットも持たない　人がある。
自分の世界は　シッカと持ち、また、他の世界もシッカと理解している人がある。」

・哲学と天文学の専攻学問の判断は、東義に始まり、二高、東京帝大まで悩み続け、両にらみの状態であった。最終決断は続き、東京帝大時であった。ものの考え方が、哲学的で広い視野を持ち、国内外の科学界全体の発展を願う起因が、長期間学んだ哲学研究にあったと思う。

・上司との対立。異端視や頑固、罵倒意見は田舎者の宿命か。

前述したが、赤城山山頂説の一戸派は、台長の三鷹説に一蹴される。一戸の言、

「**先進国の天文台は都市を離れた山頂に観測所を置いているのに、（三鷹案は）時代後れの案ではないか。子どもの教育や家庭生活に不便であるが、天文学者になった以上、そのくらいの犠牲を強いられても、甘んじて受けなければならない。観測に有利なところを嫌がるのは、文化が後れている日本に生まれて恥かしくないのか。**」と強く迫った。（原恵）

「**未来をひらく**　福澤諭吉展」より　慶應義塾創立 150 年記念　2009 年 1 月~3 月

異端と先導――文明の進歩は異端からうまれる
福澤諭吉の生涯――それは、内に秘める「異端」な思想を、
勇気と気品をもって世に説き、身をもって「先導」する挑戦でした。

内村鑑三　『異端』1908 年「世に**異端**ほど貴い者はないのである。世に**異端**があればこそ進歩があるのである。**異端**は常に新鮮である。**陳腐**なるは**異端**ではない。**異端**を恐れる者は沈静の危険を冒す者である。」（中略）

川口淳一郎と山中伸弥の対談『夢を実現する発想法』2013 年

「**高い塔を建てて見なければ、新しい水平線は見えない。今の目標で見たのでは、新しい未来は見えてこない。少しでも高いところに登って、新たな水平線を見てほしい**」

小保方晴子「ＳＴＡＰ細胞？」2014 年１月

「誰も信じてくれなかったことが何より大変だった。」

「過去数百年の生物細胞学の歴史を愚弄している。」とネイチャーから酷評されていた。

・一戸の臨終の言葉「人生の最後とはコンナものだ・・・」――意味深長である。

３、郷土の評価が高い。

片田舎に生まれ、３３歳で青森県初の理学博士となる。一戸の石碑は死没後６年（1926 年）という早い時期に顕彰碑が建立された。揮毫は陸軍大将の一戸兵衛である。恩師の大澤正毅の死後に、一戸の石碑と並んで大澤の薫陶を受けた地域民の献金により石碑が建立（教育勅語発布 40 年記念、1930 年）された。現在師弟の２基の顕彰碑が、農村小公園に凛然と並び、微笑ましい限りである。

しかし、百年前に活躍した一戸の名は、現在は一般にはあまり知られていないので､氏の存在や功績を後世に伝え、地域の誇りにしたい。

左:一戸博士碑　　右:大澤正毅碑

４、提言【主張】を評価する。

病魔に襲われ、長くない人生を悟った一戸は、速記者を呼び、口述筆記で『過去を回想して将来に及ぶ』としてまとめ、死後『現代之科学』の最終巻として発行された。

この【主張】には、自分の生涯の回想と、多くの提言が集録され、氏の科学的な思想や理念は、後世に実現しているのではないだろうか。特に一戸は、天文台の立地条件に、郊外の高地高山説を唱えたが、時の台長から追放された。

国立天文台が、高地高山であるハワイ島のマウナケア山（4205m）に建設した「すばる観測所」が、2013 年 7 月 31 日に世界最大のデジタルカメラで、アンドロメダ銀河を広範囲撮影に成功したことを発表し、世界中を驚かせた。この事実に、一戸はどのような感慨を持つであろうか。聞いてみたいところである。

くり返しになるが、【主張】の後半部には、回想以外に、科学発展、総合科学雑誌、科学者の健康、国語、国家観等への多くの提言が集録されている。

幕末の志士の坂本龍馬が「新政府綱領八策」いわゆる「船中八策」を提言して 33 歳で殺害されたが、一戸も上司より首を切られたのが 33 歳であった。

一戸の人生は、文字通り波乱万丈の人生であった。

一戸を、狭隘で変屈、変わり者と評する学者もいるようであるが、一戸の数々の思想や提言には、正鵠を得たものが多いと思われる。駆けぬけた一戸直蔵は、天文学界の坂本龍馬といえばいい過ぎであろうか。斯界や後世の判断を待ちたいものである。